

4) 地域の環境と寄り添う暮らし

4-1 まちの暮らしの景観

(1) 歴史に彩られたまち並み

- ◇本市の中心市街地は、江戸時代に黒石藩が置かれた時の町割りを基本とし、現在までその形が継承されています。本市を代表する歴史的まち並みである中町伝統的建造物群保存地区のほか、商業、業務、住宅など、中層を基調とした賑わいが感じられるまち並みが形成されています。
- ◇町名は、近代に入り一部変更されているが、現在でも中町、前町、浜町等の古くから用いられた地名が多く残されています。
- ◇市街地にみられる町割りや両側町などの空間構造、こみせやかぐじなどの特徴ある敷地利用は、江戸時代よりはじまり、地域のコミュニティを育みながら継承されてきたものです。
- ◇これらまち並みの中に、城下町を象徴する町屋や高橋家住宅、消防団第三分団第三消防部屯所などの歴史的な建造物等が、まち並みのランドマークとなっています。
- ◇また、近年の商業環境の変化などに伴い、空き店舗や屋外駐車場などの増加により、賑わいや活力の低下が懸念されます。

図 (再掲) 元禄 7 年(1694)当時の町割り (「御國中道程之図」に基づく)

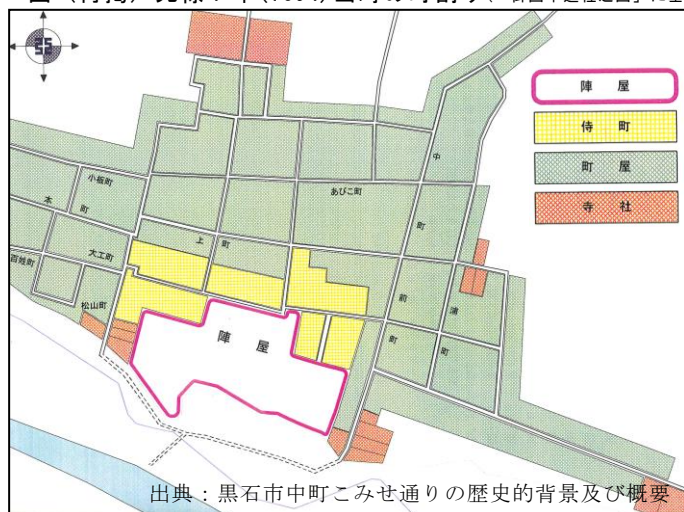


図 現在の町域 (中心市街地の一部)



津軽弁で家の裏庭という意味のかぐじは菜園や作業場所、駐車スペース、冬季の雪置き場など生活の場として使われている (前町)



中心市街地の町屋の住まいでは、かぐじに面して蔵が設けられている (横町)



県重宝に指定されている第三分団第三消防部屯所 (中町)

（２）市街地を特色づける雪国特有の空間「こみせ」

◇黒石のまち並みを特徴づける要素として市街地のこみせがあります。こみせは、明暦２年(1656)に黒石初代領主津軽信英が町割りをした時に建設されたと言い伝えられています。

◇中町には、昔ながらの風情を保ったままのこみせ通りが残っており、平成 17 年に重要伝統的建造物群保存地域に指定されています。

◇冬季における歩行者の安全性の確保等を目的とした半公共空間である「こみせ」は、豪雪地帯という気候風土から、主要な通りなどを中心に、最盛期には総延長約 4.8km 続いていました。しかし、高度経済成長期を経て、建物の建替えなどの際に取り壊しや室内に取り込まれるなどにより、現在では、こみせの続くまち並みは、中町などの一部でしか見られなくなっています。

◇道路側に一間おきに並ぶ木の柱の上に、板張りでひさし状の屋根が載った通路空間は、雨や夏の強い日差し、そして冬の吹雪から人々を優しく守ってくれる、通る人々に常に快適さを与える空間は、代々受け継がれてきた、雪と上手く付き合う工夫が凝縮された空間です。



平成 9 年に商店街の裏地（かぐじ）利用して整備された広場へと続くこみせ。雪よけの葎が付けられている



ガラス戸が設けられたこみせ（中町）



こみせが残るまち並みの再生が期待される（元町）

（３）市街地を流れるまちなかの水路・水辺

◇藩政時代の黒石陣屋は、南の崖線（がいせん）とその先の浅瀬石川に守られ、広く津軽の地を見渡すことのできる、自然の土地を利用した要塞にありました。

◇この陣屋と浅瀬石川の間には宇和堰・小阿弥堰が流れています。これらは現在では、崖線の緑と相まって落ち着いた道となっており、沿道には桜並木が続き、黒石のまちの歴史的骨格を日常の暮らしの中に垣間見ることのできる貴重な水辺となっています。



黒石台地崖地の際につくられた宇和堰 古くより農業用水として利用されてきた



散歩道としても利用されている宇和堰沿いの緑道 まちの歴史的骨格が感じられる貴重な場所となっている



崖地に造られた宇和堰（上方）と小阿弥堰（下方）陣屋が自然の土地を利用した要塞であったことを物語る

(4) 暮らしの中に生きる八甲田の伏流水

- ◇八甲田がもたらす豊かな水の恵みは、おいしい米やりんごなどの農業をはじめ、酒造業、温泉など黒石市の産業とも深く関わり、暮らしに潤いを与えてくれるものです。
- ◇江戸時代以降、地域の主要な交通を担っていた浜街道に商店が建ち並び、中町には、造り酒屋、みそ屋、しょうゆ屋などの豊かな水を活かした産業がみられました。
- ◇市街地には、現在でも歴史の厚みを感じさせる造り酒屋が建ち並ぶ通りがみられるほか、中町こみせ通りの観光・交流スポットとなっているこみせ駅の敷地内に設けられた八甲田伏流水が流れ出る「こみ泉」や、落ち着いた水辺の整備されたかぐじ広場など、黒石固有の潤いの感じられる場が存在しています。
- ◇黒石市商工会議所では、暮らしの中にある貴重な水資源を次世代に大切に守り残していきたいとの思いから、中町やこみせのある通りの店舗を中心に、八甲田の伏流水のある暮らしや営みを紹介する小冊子「くろいし おいしい 水めぐり」を平成22年3月に刊行しています。



こみせ通りの観光・交流施設の広場の一角に整備された八甲田伏流水が流れ出る「こみ泉」



こみせの雰囲気を活かした落ち着いた水辺が整備されているかぐじ広場



くろいしおいしい水めぐりは、現在18カ所が指定されており、水の豊かさを伝えている

(5) 津軽地方に伝播した作庭様式 大石武学流

- ◇大石武学流は江戸時代の初期に都落ちしてきた公卿らが、仏教文化と津軽の地元に根付いた古神道文化の思想を習合させた京都風の作庭様式です。幕末から近代にかけて、津軽地方を風靡し、黒石でも商家の庭などに見ることができます。
- ◇大石武学流の名園のひとつに、政治家加藤宇兵衛が内町の自邸に造らせた金平成園（別名：澤成園）があります。その名称には、「万民に金が行きわたり、平和な世の中になるように」という願いが込められ、当時失業対策事業の一環として着手され、一般にも公開されたため、人々に親しまれました。平成18年に国名勝に指定され、現在は保存修理事業が行われています。
- ◇同様に鳴海氏庭園（中町）もまた、大石武学流の独特の意匠や造形を良く残していることから、平成19年に国登録記念物に指定されています。



保存修理事業の進む金平成園
西方には岩木山を望むことができる



大石武学流の作風を伝える鳴海氏庭園（中町）



伝統的な町屋の住まいの中庭（中町）

4-2 暮らしの場としての住宅地

(1) 潤いや落ち着きのある住宅地

- ◇黒石台地の中心市街地の周辺と、浅瀬石川沿いの住宅地で構成されています。
- ◇黒石台地の住宅地は、明治から戦前にかけて住宅が立地した中心市街地の隣接地や浜街道の沿道と、戦後に形成された住宅地に区分されますが、総じて基盤が未整備なまま住宅が立地したため、狭い道路で構成され、公園や広場が十分でない状況が見られます。
- ◇浅瀬石川右岸では、面的整備により計画的な住宅地の整備が行われ、良好な生活環境の形成が図られています。
- ◇また、生け垣の整備や庭先を草花で彩るなど、ガーデニングを楽しむ様子も見られます。



緑化事業により季節の花に彩られた住宅地の道端



陸屋根の無落雪住宅が建ち並ぶ住宅地（ちとせ団地）



用水路沿いに花が植えられている（ちとせ団地）

4-3 集落の暮らしの景観

(1) 田園風景と調和した集落の景観

- ◇黒石台地上や浅瀬石川沿いの水田に隣接して、小さくまとまった集落が形成されています。
- ◇これら集落は、浜街道などの道路を中心に形成されたものが多く、ゆとりある敷地は、母屋、蔵、納屋、生け垣や庭木等で構成され、これらには木・石・漆喰などの自然素材も多数活用されるなど、落ち着きや穏やかさが感じられる要因となっています。
- ◇集落の主要な通り沿いは、生け垣や石積みの塀、庭木、母屋や蔵などが面するといった、集落ごとの作法が感じられる景観が見られる。また、集落の背後に水田やりんご畑が連なっており、周辺の農地を含めた秩序ある土地利用が、美しい集落景観を形成しているといえます。
- ◇各集落には、社寺や道祖神があり、大木を持つ社寺の多くは集落の入口や真ん中などの大切な位置にあるなど、集落景観のシンボルとも呼べる存在といえます。
- ◇浅瀬石川中流域周辺（街道沿道集落）では、旧街道の沿道に集落が形成され、住宅に隣接してりんご畑があり、水田は山裾まで広がり、緩やかな丘陵地は一面がりんご畑となっています。
- ◇浅瀬石川下流域周辺（浅瀬石以西）は、水田と市街地・集落が広がっています。川幅は広がり、河川敷ではサイクリングロードや花壇等が整備され、冬期には白鳥が飛来するなど、生活に潤いを与える場ともなっています。

(2) 心地よくまとまった中山間地の集落

◇東北自動車道以東の丘陵地や中山間地には、地形に寄り添うように配置され、心地よくまとまった集落が点在しています。

◇これら集落は、水田やりんご畑等の農地、周囲の里山と一体となり、総じて潤いや落ち着きが感じられる景観が形成されています。

◇また、集落の玄関口にあたる交差点付近では、地域住民による緑化活動が行われるなど、集落の環境整備にも取り組まれています。

◇浅瀬石川上流域（中山間集落）は、川沿いに集落が形成され、丘陵地はりんご畑、カスミサクラ・コナラ林、アカマツやスギの植生地で構成されています。これらの樹木は、地盤を安定させ、暮らしに恵みをもたらす（シイタケ栽培用の原木、製炭用の材、工芸品製作等）、桜や紅葉が四季の移ろいを感じさせてくれるなど、集落の暮らしと深く関わっています。

図 黒石台地上における集落の構造

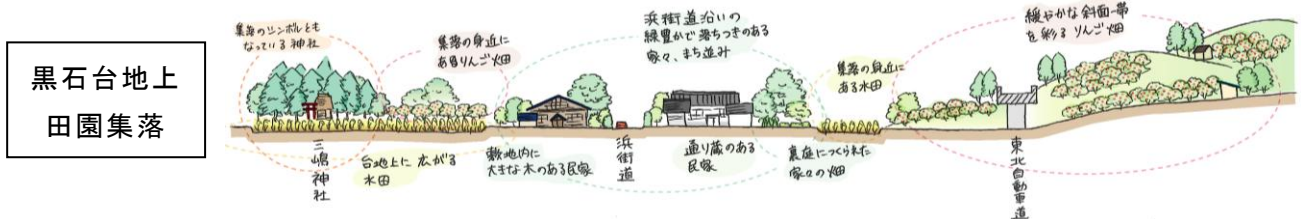
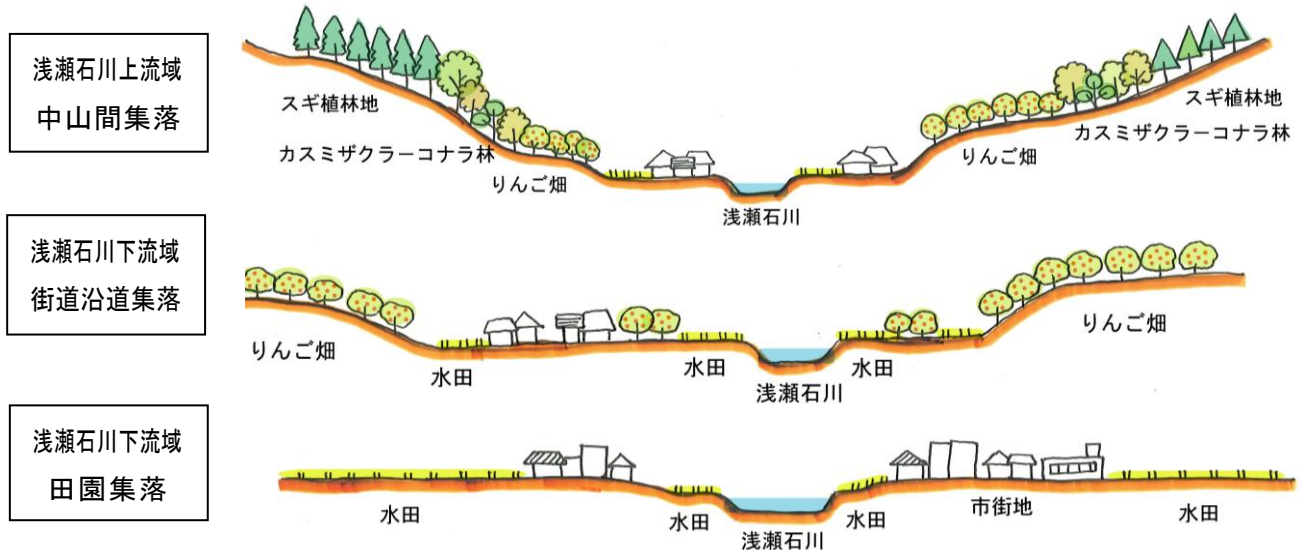


図 浅瀬石川下流域における集落の構造



浜街道沿いの緑豊かで落ち着きの感じられるまち並み



浅瀬石川中流では、集落の背後に水田が広がっている（花巻）



里山に囲まれ、心地よくまとまった集落（高館）

(3) 集落の景観を特徴づける蔵

◇黒石の集落は、主屋や土蔵、付属舎、庭、かぐじ等からなる農家住宅や屋敷で構成されており、中には、特徴的な蔵が多く見られます。これらの蔵は独特の雰囲気のある佇まいを醸しだし、集落の景観を特徴づける重要な要素となっています。

◇蔵の外壁の仕上げは、土塗り、漆喰塗り、板張り、石貼り、これらの組み合わせなど様々であり、屋根は切妻の置屋根形式で深い軒を基本とし、妻側に和洋折衷の装飾の施された比較的大きな開口部を設けた特徴的なものも見られます。

◇浅瀬石や高館、花巻などの街道筋沿いに形成された集落では街道に面して蔵が設けられており、落合や温湯、中野などの面的な広がりをもつ集落では、その配置は様々であり、主屋や付属屋と一体となったものなども多く見られるなど、集落ごとに異なった構成となっています。



庭木と蔵が連続し、落ち着いた佇まいの感じられるまち並み（高館）



通りに面した妻側には開口などが設けられずシンプルな意匠が多くみられる（浅瀬石）



生垣や庭木の緑と通りに面した蔵が心地良く調和したまち並み（馬場尻）



妻側の開口部の装飾が特徴的な蔵（中野）



付属舎と一体となった蔵（落合）



開口部や壁面に装飾が施され、主屋との調和が感じられる蔵（目内沢）

冬の雪囲い 「かりちょ」

季節を感じる風習は特に冬に多くみられます。冬場に西風を受ける集落では、かつて「かりちょ」と呼ばれる藁で編んだ雪囲いが見られ、集落で一体となって冬季の風雪を防いでいました。

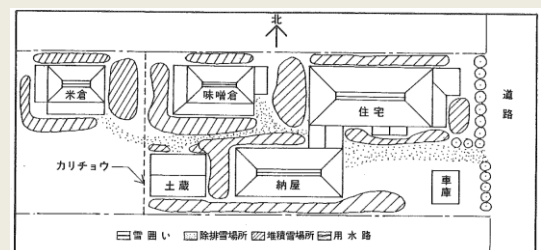
この「かりちょ」の藁の中には、厳しい寒さを利用して「干し餅」を吊るしておいたといわれています。

現在では、見られなくなっていますが、冬場の風雪の厳しさと暮らしが結びついた黒石らしい景観です。

→（右上）かりちょのある農家の平面図

→（右下）かりちょがある集落

出典：雪国の暮らしと住まい（八戸工業大学建築工学科 積雪地・住居研究会）



4-4 暮らしと自然環境

(1) 潤いややすらぎをもたらし、市域を縦断する浅瀬石川

- ◇浅瀬石川は、南八甲田の櫛ヶ峰を源流とし、市の南部を東西に横断し、黒石市を代表する河川であり、河川沿いの水田を潤しています。
- ◇古くから生業や文化と密接に関わっており、多くの校歌に歌われるなど、市民にも深く親しまれている大切な河川であるとともに、その水質の良さから津軽地域における清流として、生活、レジャーなど多様な面で多くの人々に親しまれています。
- ◇浅瀬石川流域の上流部は、青森県の県立自然公園黒石温泉郷に指定されているほか、中流部（上山形～花巻付近）はヤマメやイワナ、ニジマスなどの釣りのスポットとして知られています。

(2) 市民に親しまれる多様な水辺

- ◇浅瀬石川の河川敷には、「浅瀬石せせらぎ親水路」や「浅瀬石川河道」の一部に整備された「浅瀬石川アートの道・水辺公園」など多様な親水空間が存在するほか、サイクリングロードや広場などが整備されています。
- ◇追子野木に架かる千歳橋付近には、市民の手入れによって花壇が設けられており、広々とした水辺空間に彩りを演出している。また、千歳橋下流付近は白鳥の飛来地としても親しまれています。
- ◇市の南東部に位置する浅瀬石ダムは、洪水調節という治水面と、かんがい用水、都市用水の供給という利水面及び発電など、大きな役割を果たす多目的ダムであり、周辺にはダムを一望できる展望所や虹の湖公園などが整備されており、自然を感じながら楽しめる空間が形成されています。

河川と暮らしの歴史

浅瀬石川を含む岩木川水系は、江戸時代には津軽領内の内陸水運の大動脈であり、領内を下り、物産等を河口の十三湊から日本海廻りの上方商船に積み込んでいました。

浅瀬石川は黒石温泉郷を有する湯治場として、支流の中野川は溪流や滝、観楓等で古くから人々に親しまれてきました。また中流域にある東公園周辺もまた石法師遊園地と呼ばれ、眺望と桜の名所として有名でした。

明治から昭和初期は、鉄道網の発達によって水運利用は衰退しましたが、主に農業用水としての利用がなされ、河川沿いに広がる水田や畑を潤し、昭和 63 年に多目的ダム（治水・利水）である浅瀬石ダムが完成すると、水質も良くなり、身近な安らぎやレジャーの場として見直されるようになりました。

→（右上）大正末期の中野紅葉山

→（右下）東公園

出典：黒石市史 通史編Ⅱ 現代・近代





①浅瀬石ダム湖畔に整備された虹の湖公園



②落合大橋周辺「浅瀬石川河道」の一部に整備された「浅瀬石川アートの道・水辺公園」



③国道 102 号線高架下付近に整備された浅瀬石せせらぎ親水路



④古くから眺望と桜の名所として親しまれてきた東公園



④浅瀬石川沿いに広がる水田と浅瀬石集落（東公園）



⑤色とりどりの花が植えられており、温かみが感じられる千歳橋付近に整備された花壇

図 浅瀬石川沿いで整備・創出されている水辺空間



(3) 地域の暮らしとともに親しまれている山々

◇中野もみじ山と黒森山はともに市域のほぼ中央に位置し、身近な親しみのあるシンボルとして地域で愛され、親しまれている山々です。

◇市域のほぼ中心、中野川が浅瀬石川と合流する手前に位置する中野もみじ山は、燃えるような紅葉に染まる山と、滝や溪流などの変化に富んだ水辺が一体となり、極めて特徴的な景観を形成しています。

◇市民アンケートの「黒石市を代表又は自慢できる景色や文化」において、8割以上の方が自慢できる景色として挙げており、県下一のもみじの景勝地として古くから親しまれているほか、渓谷の中に鎮座する中野神社境内には、樹齢200年のもみじを始め、樹齢500～700年の大杉、樹齢200年のモミの木が生育し、県及び市の天然記念物に指定されています。

◇市域のほぼ中心に張り出す黒森山は、八甲田連峰の前衛にあり、市内の多くの場所から丸みを帯びた特徴的な姿を望むことができます。山寺のある仙境の地として知られ、浄仙寺境内には文学碑のあるところから『文学の森』とも称され、境内に続く参道、山門、緑が広がる明るい境内など、本市の歴史を自然とともに感じられる良質な空間が広がっています。

◇現在では無線の要衝としての機能を持っており、頂上付近の大規模なアンテナ塔は、1966年（昭和41年）に建設されたもので、親しみを感じさせる姿からはやや異質なものの印象も受けます。



①色鮮やかなもみじが滝と溪流に映え、変化に富んだ情景を見せるもみじ山



②背景に黒森山を望み、文学の森としても親しまれる浄仙寺の山門



③落合集落付近より落合大橋と黒森山 丸みを帯びた姿が印象的である



④二双子集落付近から水田と浜街道沿いのまち並みを前景に望む黒森山

図 中野もみじ山・黒森山の位置



(4) 豊かな自然と触れ合い感性をはぐくむ場

◇山岳地帯が市域面積の約8割を占め、浅瀬石川をはじめ、中野川、十川など大小の河川も流れるなど豊かな自然を有する黒石は、浄仙寺文学の森、ウォーキングセンター、中野もみじ山など、自然とふれあいながら感性を育む多様な場を有しています。

◇中野もみじ山やウォーキングセンターを中心とする「黒石市ふるさと自然のみち」は、平成22年3月に策定された黒石市都市計画マスタープランの中でも、森林の魅力や快適性をより実感できるゾーンとして活用を図るものとして挙げられています。

◇昔から文学が盛んな土地柄の黒石市には文学碑が94基もあり、このうち13基は黒森山にあります。これら13基の文学碑と周辺の森づくりは、1961年に黒石市出身の柴田久次郎氏を中心に黒石文学会によって行われ、1965年9月から文学の森と呼ばれています。

◇中野川と浅瀬石川との合流地点付近は蛇行が激しい地点でもあり、豊かな水と緑によって形成される景観は黒石市を代表するものとして親しまれているほか、身近な遊び場としても大切な場所となっています。

図 自然の中で感性を育む場とふるさと自然のみち



ふるさとの道案内板



開かれた明るい印象の浄仙寺境内奥にはかつての寺子屋を思わせる建物がある



浄仙寺の境内から続く文学の森13基の文学碑と豊かな森林で形成される



もみじ山に鎮座する中野神社

3. 黒石の景観特性と課題

1) 景観の特性(黒石らしい景観)

●津軽のシンボルである岩木山や八甲田山系への眺め

◇市内の各所から望め、校歌にも多数歌われている岩木山や八甲田山系は、四季や時間により様々な表情を見せてくれます。また、これらが美しく眺められることは、黒石市の位置や歴史的な背景を理解する上でも大切なことです。

●地形や気候風土を活かした景観構造

◇津軽平野に開けた地勢は、都市に明るさを生み出すとともに、河川沿いの平坦地や黒石台地上に広がる水田、斜面地の地形や気候を上手に活用したりんご畑など、山間地域に至るまで地形を大きく改変することなく、合理的で美しい景観構造を形成しています。

●黒石の生業を支える自然環境

◇米やりんご等の農業、酒造業や温泉等の生業は、山・山並みや八甲田の伏流水などの豊かな自然や気候風土によって支えられています。また、中心市街地では、八甲田の伏流水を活かした広場の整備が行われるなど、自然環境と暮らしが密着し、豊かさや潤いを感じられる景観が形成されています。

●美しい田園風景と心地よくまとまった市街地・集落

◇黒石台地上に広がる水田は、耕地整理が行われたこともあり、背景となる丘陵地や山並みと相まって、整然さが感じられる美しい田園風景が形成されています。
◇市街地や集落は、ほぼスプロール化することなく、心地よさが感じられるまとまりを持ちながら、田園風景と調和しています。

●暮らしを彩る歴史的資源や祭礼

◇ねぶたやよされに代表される祭礼、こみせ通りや数々のいで湯は、黒石にしかないオンリーワンの資源です。
◇市街地や集落にある歴史的な建造物や消防屯所、蔵、社寺等の大木、中野のもみじ山、地域の祭礼や行事など、市内には多様な資源が存在しており、これらが黒石らしい暮らしの景観を彩っています。

●四季折々、刻々と変化する遠景～近景の風景

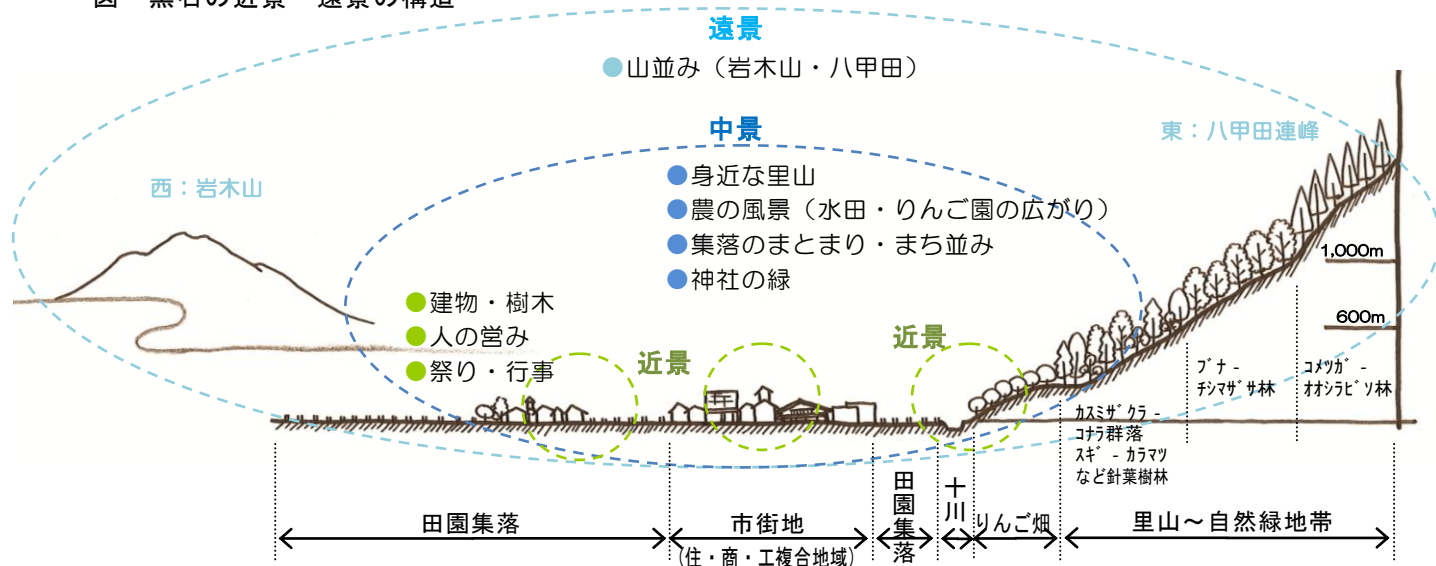
◇本市では、様々な場所から遠景に岩木山や八甲田山系を望むことができます。それらを背景に、中景には、農業をはじめとする生業が創り出す風景や心地良いまとまりを持った集落と里山、情緒あるまち並み、近景には、個性豊かな建物や樹木、日々の生活の営みがあります。
◇これら遠景～近景の風景は、四季折々に刻々と変化し、一体となって、その時々にはしか見ることのできない特徴的な景観を形成しています。
◇また、季節ごとの祭礼や名物行事・イベントは暮らしに彩りと楽しみを添えています。

図 (イメージ図) 櫛が峯上空付近より黒石市域～津軽平野を鳥瞰



八甲田連峰に抱かれ、津軽平野に開けた地勢を有する黒石市。
地形や気候風土を生かした生業や暮らしと深く結びついた土地利用は、黒石固有の合理的で美しい景観構造を形成している。

図 黒石の近景～遠景の構造



2) 景観形成の課題

[1. 地形や風土]

山並みの緑と親しみのある水辺環境の保全、創出を図るため、次のような課題が見られます。

●山・山並みの適切な保全や維持・管理

◇八甲田山の山並みや黒森山等の身近な山は、本市の景観の基盤であり、生業を支える水資源を涵養する機能を有するなど、最も重要な共有財産です。

◇今後も、総合的、長期的な観点から、これら山・山並みを適切に保全し、維持・管理を進める必要があります。

●河川の親水性・快適性の向上

◇浅瀬石川や十川などの河川は、農業を営む上で欠かせないものであるとともに、その水辺空間は、散歩や花壇づくりなどを通じて、多くの市民に親しまれています。しかし、一部の親水空間が十分な維持・活用がなされていない状況も見受けられます。また、集落内を流れる十川や小規模な水路等の一部は、コンクリート仕上げとなっており、潤いが感じられる集落景観や生業の景観と十分な調和が図られていない状況も見られます。

◇今後、親水空間として整備された場所や散歩道等の維持・管理や市民の参加などによる花壇づくりや清掃活動の実施、親水性の高い工法の導入の検討等を通じて、快適な水辺空間として維持・活用されることが望まれます。

[2. 地形や風土に育まれた生業]

賑わいのあるまちなか景観を再生し、地形と折り合う豊かな田園景観を守り、育むため、次のような課題が見られます。

●まちなかの賑わいの再生

◇まちなか（中心市街地）は、市民のライフスタイルや郊外部の商業施設の立地などによる環境の変化等に伴い、賑わいや買物環境の低下が進行しています。

◇今後、商業の活性化方策と連携を図りながら、賑わいの再生や良好なまち並みの形成を進める必要があります。

●農業の振興等による黒石らしい田園景観の維持・保全

◇水田やりんご畑は、生業としてのみならず、黒石らしい景観を構成する重要な要素であり、資源です。しかし、東北自動車道以東の一部では、長らく耕作がされていない農地の存在が徐々に顕在化してきています。

◇このため、農業生産基盤の充実、担い手の育成、観光との連携や消費者との交流等に取り組むが、農業の振興を進め、黒石らしい田園景観の維持・保全を図ることが望まれます。

●観光・交流を通じて、自然とふれあう機会の維持・創出

◇山・山並みは、四季を感じさせ、文学の森、自然のみちとウォーキングセンター、中野もみじ山などは、観光・交流を推進し、感性を育む上でも貴重な資源であるといえます。

◇今後も、これら資源の活用やネットワークを進めながら、さらなる情報の発信や価値の共有化を図り、観光・交流を通じて、自然とふれあう機会の維持・創出することが重要です。

[3. 気候・風土に寄り添ってきた暮らし]

歴史と伝統を伝え、心地よい生活環境を形成するため、次のような課題が見られます。

●住宅地や集落の良好な生活環境の維持

◇市街地内の住宅地や集落は、生け垣や庭木などによる緑化の推進や庭や空地の確保などによるゆとりある景観が形成されていますが、近年、敷地の小規模化の進行による緑化の減少や周囲から突出する色彩の住宅が見られるなど、良好な生活環境の低下が懸念されます。

◇今後、黒石の気候風土にあった住まい方や敷地内緑化の推進、ガーデニングの推奨など、生活環境の向上を図る必要があります。

●建築物・広告物の突出した形態意匠の規制・誘導

◇市街地や集落内は総じて穏やかな景観が形成されていますが、幹線道路沿いの屋外広告物や店舗では、周囲の景観から突出した形態や色彩の建築物が散見されます。

◇今後、景観法を活用するなどにより、周囲の景観から突出した形態や色彩の建築物を市街地や集落の景観特性に応じた規制・誘導を図る必要があります。

●空き地や空き家などの多面的な活用、景観の管理

◇市街地や集落内では空き地や空き家や管理が十分に行き届いていない施設等が散見されます。

◇今後、産業振興や定住化対策等の取組と連携を図りながら、多面的な活用や適切な維持・管理を進めることが望まれます。

[4. 市民が親しみ育むふるさとの景観]

多様な資源を活用し、黒石らしい眺めやランドマークを保全、活用するため、次のような課題が見られます。

●黒石らしさを現す資源の保全・活用

◇一部の資源は文化財保護法に基づき指定・登録されているが、法制度になじみにくいもの（山や眺望）等もあることから、適切な保全策が講じられていない資源も多数あります。また、景観資源に関する市民や観光客の認知や周知が必ずしも十分ではありません。

◇今後、景観資源の価値の共有化や情報の発信、景観法を活用した保全方策の実施等の取組が必要です。

●河川沿いからの眺望景観の確保

◇浅瀬石川の河川敷や橋梁からは岩木山や八甲田山への眺望が得られるなど、開放的で貴重な空間であるといえます。しかし、これら眺望景観を、屋外広告物や大規模な工作物が損ねている状況も見受けられます。

◇今後、将来にわたり山・山並みへの良好な眺望景観を確保し、快適な水辺空間の形成を図ることが期待されます。

[5. その他]

●広域的な観点での情報の発信や調整

◇東北自動車道や国道 102 号等の幹線道路、鉄塔、広域案内サインは、広域的な役割を持った施設であり、その管理者は、国、県、民間事業者等多様です。また、近年では、定住対策や観光・交流の促進は、津軽地方の市町村が連携しながら取り組むなどの動きも見られます。

◇広域的に広がり・つながる施設の景観の整備等を進めるためには、青森県や弘前市等と連携を図りながら、広域的な観点での情報発信や景観に関する調整を進める必要があります。